



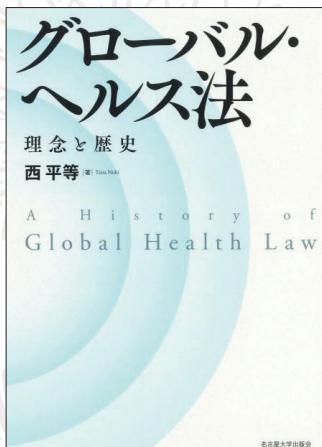
Title	書を抱えてフィールドに出よう！
Author(s)	戸田, 登美子; 島津, 美寿季
Citation	目で見るWHO. 2024, 90, p. 30-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/99628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書を抱えてフィールドに出よう!



国際保健という言葉を聞くと、ある地域の健康課題は何か、誰を対象にどのような活動をするのか、といった内容を想像する人も少なくないでしょう。本書では、そのような事柄は勿論のこと、「法」という観点から国際保健協力を展開するための規範や標準についても詳細かつ具体的な説明がなされています。また、

グローバル・ヘルス法 理念と歴史

著者：西 平等

出版社：名古屋大学出版会 2022年2月発行

WHOが誕生した歴史的背景や、国際協力が当時の国家や民間組織等の枠組みから受けた影響についても紐解いていきます。19世紀から今日に至るまで、国際保健協力が展開される裏で、人々や組織の間でどのような攻防が繰り広げられてきたのでしょうか。

本書の特筆すべき内容の一つは、19世紀後半に蔓延したコレラに対して、国境を越えて展開された保健協力についての詳細な解説です。その時に生じた保健思想の対立は、その後のグローバル・ヘルスの理念の対立にも通底するものがあります。続く国際連盟期では、生物学的

な理念か社会医学的な理念のどちらの理念に基づいて感染症に立ち向かったのか、それぞれの国や組織の思惑を絡めてダイナミックに説明されています。更にCOVID-19やたばこの規制など、現在のWHOの活動についても鋭く言及しています。

私たちは歴史から何を学ぶのか、現在展開されている国際保健協力はどのような要因を受けてその活動に至ったのか、歴史及び各国・組織・社会経済による影響など様々な要因に思いを馳せることのできる一冊です。

(紹介者：戸田登美子)



近年では、世界の4人に一人は、一生のうちに一度は精神不調をきたすといわれており、精神保健はとても身近なもの。また、ミレニアム開発目標には、精神保健や障害は取り上げられていましたが、持続可能な開発目標(SDGs)や「持続可能な開発のための2030開発アジェンダ」には、これらのトピックが明確に取り上げられ、精神保健や障害、

国際精神保健・ウェルビーイング ガイドブック

著者：井筒節、堤敦朗（編著）

出版社：金剛出版 2022年9月発行

ウェルビーイングについて理解することの重要性はますます大きくなってきています。

本書は、国際的な精神保健とウェルビーイングに焦点を当てた、わが国で初めての専門書とのことです。本書の著者でもある堤敦朗さんには、昨年度に、関西グローバルヘルスの集いへご登壇いただき、本書についてもご紹介いただいておりましたので、この機会に拝読させていただきました。

本書を読んでまず、各章の濃厚さ・詳細さに圧倒されました。20超人の著者が並んでおり、各プロフェッショナル

が、精神保健の分野の国際機関やNGO、そしてその活動内容などに関して、とても詳細かつコンパクトに解説しており、深い理解につながりました。

本書の後半には、“実践”編として、さまざまなフィールドワークの状況が記載されていますが、精神保健的介入を行うにあたって、その状況によって多種多様な対応が求められることがとてもよく感じられました。精神保健でのキャリアパスを考えている方にはぜひおすすめしたいと感じました。

(紹介者：島津美寿季)